2019 年度事業 進捗報告書（実行団体）

● 提　出　日　：　２０２１年　　９　月　　３０　日
● 事　業　名　：　another family
● 資金分配団体　：　公益財団法人信頼資本財団
● 実 行 団 体　：　一般社団法人 sps ラボ若年認知症サポートセンターきずなや
● 新型コロナウイルス対応緊急支援助成（通常枠での追加助成）の有無　：　☑有　☐無

①　実績値

アウトプット	指標	目標値	達成時期	現在の指標の達成状況	進捗状況
本事業のターゲットである当事者主体が主体的に事業運営できる仕組みができる	仕組みの運営に関与する内外の人数	5	２０２１年３月	7	1
本事業のターゲットである当事者主体によるプログラムができる	プログラムの実行状況	当事者主体によってプログラムが複数実行されている	２０２１年３月	プログラムから、独立した活動へ向けて進歩している。	1
ソーシャルワーカなどの専門家である支援者と若者が一緒に取り組む活動を行なう	活動の件数	3	２０２１年８月	4	1
ソーシャルワーカなどの専門家である支援者と若者が一緒に取り組む活動を行なう	参加する専門家の意識	ダークサイドの思いを理解した専門職の参加が増えた。	２０２２年２月	達成の状況の確認中	2

＊進捗状況：1 計画より進んでいる 、2 計画どおり進んでいる 、3 計画より遅れている、4 その他

② 事業進捗に関する報告

1.事業計画に掲げた短期アウトカムの達成の見込み
1.達成の見込み
2.アウトカムの状況
A：変更項目 ☑変更なし　☐短期アウトカムの内容　☐短期アウトカムの表現　☐短期アウトカムの指標　☐短期アウトカムの目標値
5. 新型コロナウイルス感染拡大に対して、事業活動を行う際に工夫した点
若者のシェアハウスに近い住まいとしての逃げ場であったため、室内の感染対策（手洗い・消毒・換気等)。(医療介護者等でない若者達の感染対策意識を高めること）イベントなどを行う時、人数などを制限して、感染対策をして行うよう指導。ミーティングもできる限りリモートで行う。住まいの消毒・近隣トラブル等の対応については、担当の職員に対応をしてもらう。地域との関係もあり、感染者が増えている時は、高齢者と若者達の導線を変える・会わないようにする工夫をする。若者のやりたい行動の欲を理解しながらも、その欲を少し抑えてもらえるような心理的な対応。

③ 広報（※任意）

1.メディア掲載（TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB 等）

・NHK 奈良ニュース（取り組み）　・奈良テレビ（キャンプ活動）　・KBS 京都（孤立孤独支援）

2.広報制作物等

・　活動ユーチューブ動画

・　活動リーフレット

3.報告書等

中間評価報告書

事業名:　another family
資金分配団体:　公益財団法人信頼資本財団
実行団体:　一般社団法人SPSラボ若年認知症サポートセンターきずなや
実施時期:　2020年4月～2021年3月
対象地域:　奈良市
直接的対象グループ:生きづらさを持つ若者　間接的対象グループ：若年性認知症者、地域住民

概要

事業概要	若年性認知症者への福祉事業を行なう中でボランティアとして参加してくれた若者の中に、将来的に働きづらさを抱えるリスクの高そうな人物が一般的な集団より高い割合でいた。彼らは支援がなければ社会の壁にぶつかり孤立してしまうリスクがある。事業ターゲットである若者は自らの困りごとを自分で解決したいという意思や、他者に貢献して支える役割を担いたいという意思をもっている。課題や困難を抱える若者と被支援者にするのではなく、彼らが学び、働き、実現する場と支援を提供する
中長期アウトカム	奈良市において、生きづらさを持つ若者が主体的に社会課題の解決に関与できる環境がある地域・社会になる。
短期アウトカム	事業ターゲットのような当事者が必要とする場を、自ら創ることができるように育成教育をしながら、当事者が必要とする場を考え創り、主体的に実践できるような仕組みのプロトタイプができる

事業の背景

(1) 社会課題	若年認知症の人や家族に対する活動を行う中で、地域で生きづらさを持つ若者達と出会い、孤独感を感じていること を知る。出会ったのは、卒業後引きこもると語る人・引きこもっていたが勇気を出してボラ ンティアに参加した人・個性や対人関係で苦しんでいる学生などであり、障害者と健常者の 狭間で苦しんでいる人が多いことを理解した。若者達は、現状の制度やシステムでは居場所 がなく、社会にも居場所がない。
(2) 課題に対する行政等による既存の取組み状況	児童虐待地域協議会。奈良市子どもの豊かな未来応援プラン。ひとりぼっち0計画等、児童 への対策が多い。奈良県ひきこもり相談窓口では、当事者、家族の電話相談または来所相談 はできるものの解決には至らないと考えています。その他計画はあるものの、具体的な地域の取り組みは、社会福祉協議会等の活動として行なわれていますが、多世代型の脱・孤立の取り組みは現状ないと考えています。障害者制度に近い間と、企業社会に近い間との若者等の孤独孤立支援には、大きな枠組みがあり、今回、企業社会に近い若者等の孤立孤独支援を行うことは、現状制度にない形になる。障害者制度に近い間に関しては、既存の施設や制度が枠を広げる異様な努力などによって解決することが可能だと考えている。相談事業所は、山ほどあるが、その後の居場所となる場や支援者がいないことが問題である。
(3) 休眠預金等交付金に係わる資金の活用により本事業を実施する意義	企業社会側の間で苦しむ若者等は、「自分でなんとかしないと」「努力しろ」等、自己責任の中で孤立・孤独に対応することが当たり前として考えられている。制度も障害者や困窮者等になっていない問題として、支援体制はない。しかし、この問題を放置することによって、体調を壊す・困窮状態・孤立孤独になり、制度を利用することにもなる。何かが起きる前の早期支援こそが、財政や経済的な視点からも重要であり。社会保障の寄与にもつながると考える。ただ現状は、何かが起きた時の制度予算であり、その仕組みでは早期支援の体制ができない。予算も人材もない状況で、問題点はわかっていてもなかなかモデル・プロトタイプの活動はできない。今回の、資金活用は、失敗をさせてもよく、スピード感持って、自分の得意なことや考え方を実践できる新しいチャレンジができることが大きな意義である。既存の相談機関のあり方やその後の居場所をどう作るのか、今新しい考えにおけるチャレンジが必要であり、そのチャレンジを推進してくれる事業であると考える。

評価実施体制

	評価担当分野	氏名	役職
内部	統括・相談部門		代表
	事務・会計部門		事務局
	室内若者部門		スタッフ
	野外若者部門		スタッフ
外部	教育・評価部門		TRAPE代表
	教育・評価部門		スタートアップ（事業）
	評価部門		G&L共生研究所

評価実施概要

評価実施概要	本プロジェクトが若者の脱・孤独に寄与する取り組みかどうかについて、プロジェクトに関わっている若者（以下若者）に現在のウェルビーング状態やポジティブ度を多面的に測定できるPERMA-Profiler（金沢大学 心理科学研究所）を実施し検証する。その後、若者へのインタビューをPO活動前と後の状況について行う。若者とともに活動している地域関係者にもインタビューを行い、第三者の視点でのPO活動についての評価を行う。あと、現場で行われたチャレンジ数や相談件数・参加者数などから、PO活動の中間報告についての考察を行っていく。
自己評価の総括	当初の目標は、5人のチャレンジ参加者を目標として、このPO活動をスタートさせた。最初の５名のやりたいことやチャレンジについての語り合いから、専門家への教育的な助言などを行った。若者達は、気持ちが動くと同時に、チャレンジへの実践モチベーションが高まり、計画より早い実践のチャレンジとなった。そのチャレンジをきっかけに、基本クローズでの活動であったが、多くの若者相談につながった。また、つながった若者達のチャレンジへのモチベーションも高く、様々なアクションを行うことになる。コロナの環境では、思った動きができない状況であったが、それでもできることからスタートできたことは、とても良い実践状況であったと考える。想定以上の相談件数もあり、相談内容の濃淡が入り混じって、対応しきれない状況に陥ったことは反省点である。企業社会の間と障害者等制度が利用できない狭間の孤立孤独問題は、今の組織力等を考え、若者支援という定義をしっかりしなければ、範囲の広い孤立孤独問題との混合により、取り組み自体の効果が低下・悪化することを再度理解した。企業社会の間という制度から遠い早期支援の体制を考えるのが、今回のポイントであり、制度に近い間に関しては、制度側への連携での対応とするなどの役割分担が必要である。そこでわかったこととして、プロジェクト開始前の特徴は、生きづらく、孤独であったという若者がやはり多かったということである。その要因として、今まで社会が作り上げてきた「こうあるべき」という枠組みの中では自分を表現できず疎外感を感じ、そんな自分に劣等感を感じもがいているリアルな姿であった。そんな中での何もしない焚火の会には、何十人も若者達が集まる。そんな光景を見ている外部関係者からすると、高度成長期に追いつけ追い越せ、何かしなければという高齢者には驚きである。本プロジェクトを通して、同年代の若者、同じような思いをもった若者、世代を超えた大人たちとつながり、関係性をもち、協働していく重要さと楽しさに、達成感と自己肯定感を感じているということである。今回の若者の変化は、本プロジェクトの意味そのものであり、本取り組みが脱・孤独に寄与する可能性の１つの実証となっている。

中間評価報告書

評価結果の要約

評価要素	評価項目	考察	
実施状況の分析	⑤実施状況の適切性	妥当性「高い」	本プロジェクトが若者の脱・孤独に寄与する取り組みかどうかについて、プロジェクトに関わっている若者（以下若者）に現在のウェルビーング状態やポジティブ度を多面的に測定できるPERMA-Profiler（金沢大学 心理科学研究所）を実施し検証を試みた。結果として、ポジティブ感情（Positive emotion），物事への積極的な関わり（Engagement），他者とのよい関係（Relationship），人生の意味や意義の自覚（Meaning），達成感（Accomplishment），全体のウェルビーング（Overall），身体的な健康（Health）が平均２ポイント改善、またネガティブ感情（Negative emotion），孤独感（Lonely）はおおよそ1.5ポイント改善となった。つまり、すべての項目でプロジェクト開始前に比して現場のウェルビーング状態が高く、ポジティブで孤独が改善しているという結果となった。同時に、この定量評価内容をさらに具現化し見える化するために、若者に対してプロジェクト開始前と現在の気持ち、状態についてインタビューを行った。 　そこでわかったこととして、プロジェクト開始前の特徴は、生きづらく、孤独であったという若者がやはり多かったということである。その要因として、今まで社会が作り上げてきた「こうあるべき」という枠組みの中では自分を表現できず疎外感を感じ、そんな自分に劣等感を感じもがいているリアルな姿であった。現在は、「やりたいことができている」「自分を表現していいことを知った」「いろいろな役割をえた」など生きづらさ・孤独感が改善してきているという声に変化しつつある。 また、プロジェクト開始前後での変化の特徴として、「１日の活動量が増えた」「つながっている人の数が増えた」「やりたいことが生まれた」「達成感を感じている」「自分には役割があると思えるようになった」「自分には可能性があるように思えるようになった」「自分の行っていることは自分・周囲・社会にとって意義深いと思っている」があげられる。若者に共通していることは、本プロジェクトを通して、同年代の若者、同じような思いをもった若者、世代を超えた大人たちとつながり、関係性をもち、協働していく重要さと楽しさに、達成感と自己肯定感を感じているということである。今回の若者の変化は、本プロジェクトの意味そのものであり、本取り組みが脱・孤独に寄与する可能性の１つの実証となった。
	⑥実施をとおした知見の共有、活動の改善	妥当性「高い」	定量評価（PERMA-Profilerの実施）、定性評価（インタビュー）の結果において、本プロジェクトを通して若者の生きづらさ、孤独が改善するという変化が認められた。変化の背景について若者の声を元に考察する。 　若者が生きづらさ、孤独の理由としてあげていたのは「安心できる場・人間関係がない」「こうあるべきという枠がしんどい」「認められていない」「他人軸での役割を押し付けられる」などであった。 　そんな思いを抱いていた若者がインタビューにおいて、本プロジェクトは「安心できる場」「ひととの繋がりができる場」「自由度が高い場」「失敗を許してくれる場」「信頼してまかせてくれる場」「ストレス軽減できる場」「練習の場」「チャンスの場」だと答えている。つまり、本プロジェクトは彼らが自ら生きづらさ、孤独の理由としてあげた内容の真逆の要素を提供しているといえる。 　また、インタビューにおいて「場を作らねばならないが、場があればいいわけではなく、そこにひとがいる必要がある」という声があった。本プロジェクトはまさに「環境」「活動」そして「ひと」それぞれがデザインされている。そして、それらが融合しているからこそこのような変化が若者に生まれているのだと思われる。 　「環境」とは、若者が安心できる場である。このような「ひとによって意味が違っていい場（コミュニティ）」が今まで社会になく、今まで社会が作り上げてきた「こうあるべき」という枠組みを超えた新しい場の在り方なのではないだろうか。「活動」とは、若者がしたいことを発見、承認、実現していく体験のことである。若者はその活動を通して、自己と向き合い、他者のかかわる価値を自然な形で知っていったのである。 　「ひと」これは本プロジェクトの肝である。「環境」「活動」は一時的にあればいいものでなく、継続の中で日常に存在している必要がある。そのためには、その土台を支え、文脈を埋めることが重要で、それが「安心な環境、安心なひととの関係」となる。今回同年代の若者と世代を超えた大人と協働して進めていった。 　そこでの大人の役割は「包み込む」「否定しない」「承認する」「許容する」「待ってあげる」「やりたいことを本気で後押しする（環境のお膳立て）」「相談を聞く」「放任する」である。このような関わりは今の社会にはない貴重な体験だとインタビューでも明らかになった。 　今まで社会が作り上げてきた「こうあるべき」という枠組みの中で、自分を表現できず生きづらさ、孤独感を抱いていた若者たちは、自分たちを「ダークサイドヤング」と呼ぶ。 そんなダークサイドヤングな若者は、本プロジェクトを通して生きづらさ・孤独を改善させ、さらに社会をよりよくする原動力となる原石であることも見えてきた。 　本取り組みにおける「ダークサイドヤング」こそが日本の持つ新たな可能性になるのではないだろうか。
	⑦組織基盤の強化	妥当性「高い」	当初は、代表とPO活動当事者となる若者4人での組織体制であった。約１年の取り組みの中で、外部専門家における教育部門の設置で、定期的なミーティングや教育を受けることのできる部門が設置できた。又、当事者の若者等もそれぞれのスキルがあり、そのスキルを相互支援の形で使うことで、各自のスキルアップややりたいことの実現にプラスに機能している。 事務局部門も設置し、今まで全てを代表が行っていたが、会計等の事務作業を担当できるものを雇用できたことで、全体的な統括として、柔軟に動ける体制ができた。 当事者となる若者が増加してきたことにより、当事者部門もでき、よりPO活動に当事者の若者の声を生かすことができる環境になった。 室内部門・野外部門の中のチャレンジコンテンツが充実してきた。より幅広い選択肢を具体的にチャレンジ・参加しやすい環境になってきた。その部門ごとに担当できる専門家を雇用することができたことで、それぞれの若者のフォローも当初より格段充実したものになっている。 教育部門関係者も、事務局部門関係者・当事者活動部門関係者等からも役割が明確になって、運営しやすい環境になったという声も多い。 以上のようなことからも、適材適所の人材配置ができ、より成果があがりやすい組織体制になった。

中間評価報告書

非資金的支援・PO活動評価

PO活動の体制	PO活動体制　１０名 外部専門家　２名　当事者支援専門家　１名　事務　２名　福祉専門職　３名　当事者若者担当２名
以下項目において、どのような非資金的支援を実施しており成果を上げていますか。	
基盤構築	当初、代表と当事者若者代表と2人の当事者スタッフのスタート。 PO活動開始により、統括・若者の活動教育の外部専門家２名　　野外・室内部門の設置　若者当事者部門設置ができる。当事者スタッフの増員や事務員の雇用によって、ガバナンスの整備・運営体制の整備が強化できた。 若者の育成としては、外部専門家により、当事者主体のPO活動についての教育ができている。新しい知識やプロジェクトの振り返りなどが定期的にできている。
事業運営	若者主体の新しい事業を作る準備段階であるため、まず法人格の取得を目指している。法人格を取得し、当面は、ファンディングや助成金等の申請を行いながら、事業運営の安定を目指していく。
連携強化	孤立・孤独の若者支援という言葉の範囲が広い。 多種多様な悩みやステージ等がある。自分たちの目指す孤立・孤独の若者支援の定義をしっかりと持たなければいけない。そのため、自分たちでは、対応できない若者たちもいるが、排除でなく、よりあう環境を提示できるように、既存の制度の事業所等との連携強化が必要。　社会福祉協議会・行政のひきこもり課・障害福祉課・障害者施設等との連携を強化。 実行団体同士の連携 連携強化は、重要であるが、コロナ等によって、直接の視察や意見交換等が難しい。そのため、資金団体によるWEB交流などによって、連携の強化・情報共有を行っている
資金調達	現在は、PO活動資金のみで活動を行なっている。今後は、活動を広めファンの拡大による寄付・当事者団体としての会費等も考えていく。クラウドファンディングや助成金情報など、資金管理団体から情報をもらい又指導をしてもらいながら、自らも勉強会などを開き、持続可能な資金調達のあり方を考えていく。
評価	大学の教授や研究所等との連携で、評価スキルの導入を図る。福祉分野としては、評価をできることと、できないことがある。評価を追い求め過ぎれば、本人の心理面・生活面に悪影響を与える。財政や経済の効果だけでなく、本人の生活の質を軸とした、評価のあり方を考えていければと思う。今の生き方と、新しい未来の生き方を求め探している若者のチャレンジなので、過去のデータや経験則から図る形でないものを追い求めたい。チャレンジを鋭くしながら、多くの失敗をすることの評価を大事に、過去わかっているような無難なフォーマットにならないように気をつけたい。そして、一番大事な当事者の若者の気持ちを尊重し、新しい社会の創出のお手伝いを裏方で大人達が行うように今後も対応していきたい。
普及啓発	YouTubeで、PO活動の動画を流していきます。 奈良テレビで、若者活動が放映されました。
その他	

外部状況の変化による影響

事業実施に対する正（ニーズ増）・負の影響（活動・アウトプットへの影響）	本プロジェクト当初に想定したより多くの若者が参加し、また多くの事業が生まれた。当初予定していた参加者は5名であったが、36名から初期相談があり、そのうち29名の若者が何かしらの形で参加し、（事業参加者：18名、相談のみ11名）、またそこから16もの事業が生まれた。ここから本プロジェクトに対するニーズを強く感じる。これからの課題としては、若者がさらに多くのチャレンジをすることを日常的に伴走する近い関わりをする大人の数を増やしていくことがあげられる。この存在を担保することで、今回得た若者の変化をさらに後押しすることにつながると考える。
事業成果に対する正・負の影響（アウトカムへの影響（想定するアウトカム内容の変化・目標値の変化））	今回若者の生きづらさ、孤独を定量評価（PERMA-Profilerの実施）、定性評価（インタビュー）で見える化して、本プロジェクトの現時点でのアウトカムとした。現時点では若者の変化が見られたがこのままこの変化が継続するのか、または一時的なものとなってしまうのかこのあたりを引き続き観察していくことが必要であると考える。そのためアウトカムは若者の変化、チャレンジしている若者の数が増える、取り組み事業数が増えるなどとしていく。また今後は各事業のフェーズや参加者数に応じて大人による関与の強さ、タイミング、手法などを適切に変化させて、アウトカムを最大化する方向へ適宜調整していく想定をしている。
追加助成の実施	有■ 無□
有りの場合の、その実施状況や効果について考察ください	コロナ助成の実施状況・効果について コロナ等の社会変化における若者の生活基盤を整える。「給水ポイントの役割」 若者の心理的安全性の確保・場の提供・食のサポート・住居利用等 若者自身が中心となるPO活動で、専門家が後方支援体制をしている。 利用開始から、２月まで、通所利用延５８名　２名が毎日宿泊利用をしている。 効果：今まで布団で寝たことがない人が、布団で寝れることにより、規則正しい生活ができるようになった。（2人とも正社員になるための努力もスタートした）自分の部屋に早く帰りたいと思えるようになった。仲間との出会いが孤立・孤独感を減少させている。誰かに必要と思ってもらえることが嬉しい。毎日死にたかった・居場所のなかった子が、仲間と出会い・安心できる場ができて、生きてもいいと思えるようになった。

中間評価報告書

中間評価による活動の改善（実施状況の分析・アウトカム達成度合いを見込み活動をどのように改善したか）

中間評価前に事業計画・評価計画の見直しをしましたか。	はい■	■不十分な点を明確にするために計画書類を関係者間で見直しを実施した ■アウトカム・指標等を見直しより精緻化させた
	いいえ□	□事前評価時に十分に計画出来ていたため不要 □業務負荷の観点から見直しを実施していない □その他（　　）
中間評価を実施して、事業計画の見直しを行いましたか	はい■　（事業計画の改訂版を添付する）	
	いいえ□	
「はい」の場合の改善内容・理由	当初の計画よりも早く進んでいるため、ゴール設定をもう少し先までのチャレンジ設定　に変更する。若者達が、リアルな実践活動（経済活動につながる活動や、同じような問題を持っている他者や地域に対しての課題解決型の活動等）を行い、今後の活動を通じ、どう生きていくのかを考えながら、「活動」「環境」「人」バランスを保ち、壁と向き合っても孤立間やネガティブ感が増加しないよう取り組んでいく。	

今後の事業実施に向けて

事業実施における留意点

①PO,活動における若者支援の若者の定義を構築する
②個の問題と地域問題の違いについて
③一過性の実践と継続の実践の違いについて
④ファンディングや資金調達について
⑤当事者主体における運営について
⑥動画等発信における活動の広報の効果に対する対応について

社会課題解決のための自律的かつ持続的な仕組みの形成

若者の当事者主体を活かした、新しい社会課題解決場作りを行う上で、法人格や運営の方法などをレクチャーしていくことが大切。経験者や専門家が後方支援であり、そのような立場の方々が若者を支援する活動ではないことが大切であるが、最初若者だけでスキルや予算を集めることなどが難しいので、そのあたりを自立し、継続できるようにするためのプロトタイプを様々チャレンジしてもらっている。
人から言われた事をするのではなく、自分の生きずらさを解消するためには、自分がどのようなものを必要とし、それを手に入れるためには何を今するのかを失敗しながら、実践を積み重ねて欲しいと思い活動中である。
　生きずらさの解消について、やりたいことに焦点を当てて、実践をチャレンジをし、孤立間や孤独感の解消にはつながっているが、活動の運営までの責任や社会課題の解決の思いには至っていない。
活動継続などの意味より、あくまで自分の生きずらさの解消・今の達成感を重視していることが多いため。後半は、自分の生きづらさ解消・達成感等と社会課題・地域課題との実践との違いや活動の継続の意味などを理解しながら、チャレンジを進めていこうと考えている。